現代の「立山観」に関する一考察
―企画展「立山があるある展」アンケートより―

森山　義和

はじめに

富山県のシンボルを尋ねられたとき、「立山」という答えに違和感を抱く県民は少ないだろう。また、富山県を他県の人に紹介するとき、海の幸やおいしい水、蜃気楼など、富山のシンボルとして挙げるものは数多くあるが、「立山」ほどしっくりくるものはないのではないだろうか。

これは、「立山」が富山県民の心に深く根ざしている証拠と言えるであろう。わざわざ尋ねずとも「富山県のシンボル、立山」という表現がごく自然に使われ、受け入れられている。また、富山市は市内の至る所からの眺望が魅力の「立山あおぐ特等席」としてＰＲし、県内には立山の眺望をアピールする施設が少なくない。これらのことから、「立山」がふるさとを実感させるシンボル的な存在となっており、加えて立山の存在を誇りとしている心情が読み取れる。

昨年度の研究紀要では、「富山県のシンボル、立山」という表現や、「富山イコール立山」という印象には、子ども時代に歌った校歌が影響していると考え、校歌の歌詞中の「立山」について迫った(1)。

富山県内すべての小学校・中学校・高等学校・特別支援学校を対象とし、令和元年現在、校歌の中に「立山」が歌われているか調査し、校歌の歌詞に「立山」がある学校数について確認した。そして、「立山」がどのように歌われ、どのように表現されているかを分析し、富山県民と「立山」との関わりを考察した。そのなかで、校歌の中の「立山」は、単なる「山」として表現されていないこともわかった。美しさや高さを讃えるだけでなく、「仰ぐ」「光る」といった敬意や畏怖の念が込められていることも少なくなかった。また、「あの立山のように…」と、子供たちが目指す目標とするような校歌もあった。

校歌の歌詞を検討した結果、県民の「立山」愛を育む端緒の一つに校歌があることがわかり、学校教育の果たす役割の大きさに気付いた。また、家族からの教えも確固として残っており、「立山」の存在を誇りとし、「立山」を愛する心情は、家庭及び学校生活のあらゆる場面で育まれ、長い年月をかけて醸成されていくことが分かった。つまり、「富山県のシンボル」としての「立山」というあり方（＝「立山観」）は、歴史的に形成された認識だと言える。

令和２年度前期特別企画展「立山があるある展」では、「富山県のシンボル」＝「立山」という「立山観」の形成過程と、現代の「立山観」について考察し、紹介した。また、立山博物館が紹介する資料に加えて、観覧者全員を対象にアンケートを実施し、観覧者各々がもつ「とっておきの立山」・「心のなかの立山」を調査した。そして、このアンケートのコメントを企画展でも紹介することで、現代の「立山観」について双方向的な視点をもとに、より多角的に捉えようと試みた。

本稿では、このアンケートを基に現代の「立山観」を考察するとともに、古からの「立山観」との比較し、繋がりや相違点を踏まえ、人々が抱いてきた「立山観」について迫ってみたい。

１.「立山観」の概要

まず、従来の「立山観」の変遷についてまとめてみたい(2)。

立山を眺めると、屏風を広げたように連なる雄大な山容は神々しく、特別な存在感がある。それ故、古来人々にとって立山は恵みを与えてくれる神であり、同時に祖先の魂が集まるあの世とも信じられ（山中他界観）、

人々は自ずと手を合わせて遥拝した、これを立山信仰の原点として考える。立山が初めて文字として歴史に登場するのは、奈良時代の『万葉集』である。その中で、大伴家持が「立山の賦一首並びに短歌二首」にて「立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし」と詠い、立山を「神の山」と表現した。平安時代末期の『今昔物語集』では、「日本国の人罪を造りて、多く立山地獄に堕つ」と記され、立山＝立山地獄という強烈な印象を与えたと言われる。また、『本朝法華験記』に記述された立山地獄の景観はすさまじいものであり、地獄がこの世の立山にあるという修験僧の見立てや、地蔵菩薩の霊験による立山地獄からの救済譚は、日本の地獄思想に影響を与えた。その一方で、『梁塵秘抄』のなかで後白河法皇は、「験佛の尊きはひんがしのたちやま」とも詠んだ。やがて立山山中で修行する修験者が現れ、鎌倉時代の終わり頃には麓の芦峅寺集落と岩峅寺集落に宿坊や寺といった宗教施設ができるなど、拠点が形成されていった。立山信仰の広がりのなかで、越中にある霊山としての立山のイメージが定着していった。

室町時代には説話の流布や唱導説教などを通じ、立山は地獄のある越中の霊山として広く知られるようになった。例えば、京都嵯峨の清涼寺の由来を伝えた清涼寺縁や、猿楽能「善知鳥」では、生前の罪業によって立山地獄に堕ちた話をえがいている。当時京都の人々の間では、亡者の行き先としての地獄がある山、あるいは修験者の修行の場として、立山は知られていたと言える。

江戸時代、生きたままあの世に登り地獄をめぐれば、罪が許され極楽往生が約束されると信じられ、多くの人が立山に憧れ、全国から登拝者が激増した。加えて、立山曼荼羅を使った諸国への廻壇配札活動や立山登山案内図・名所図会の出版がさかんとなり、一般庶民の立山参詣旅も増加した。これらの動きの中で、越中の霊山立山は上層身分から庶民層までの広がりをもって全国的に知られ、江戸後期には越中の名所と見なされる傾向が強くなっていった。

明治初期の神仏分離政策にともなう廃仏毀釈、廃藩置県による変化に大きな影響を受けた立山は、それ以降、信仰の山に加え観光の山となり、少年たちの成人儀式の山ともなっていった(3)。このような変化のなかでも、家持の時代以来の地域を代表するシンボルとしての立山というあり方は変わらず、立山は近代富山県のシンボルとなっていった。「立山があるある展」で紹介した資料のなかにも、その当時の「立山観」をあらわしたものがある。例えば、富山県が誇る立山酒造株式会社の日本酒「立山」は、県の霊山立山連峰に由来する。明治から大正時代にかけて富山が生んだ大横綱「太刀山」の四股名は、郷土の名山立山に因み板垣退助が命名したと伝わる。富山売薬の薬の差袋やみやげ品、預袋や預箱にも「立山」がデザインされている(4)。

昭和以降も、立山に因んだ例は数多くある。第一薬品工業株式会社の社章は「立山」をデザインしている。その由来について「立山のように雄々しくありたいという願い」とともに、「富山を語る場合、立山は欠くことのできない存在」との言葉が並んでいる。また、吉江酒造株式会社の酒銘「太刀山」は、富山県の象徴霊峰太刀山（立山の別名）に由来する、と述べている。株式会社源が運営する「立山そば」の名称も、「富山の代表する山」＝「立山」であり、「立山からの雪解け水」を使用していることに因んで名付けられた。立山黒部アルペンルートを運営する立山黒部貫光株式会社の社名には、創業者佐伯宗義の「わが国に比類なき立山黒部の大自然と古くから伝わる山岳信仰の歴史を尊重して」、「世に紹介し国民創造力涵養の道場たらしめんとする」という熱い思いが込められている。現在でも、新進気鋭の大関「朝乃山」の四股名にも「立山」が込められている。

このように「立山」に憧れ、「ありがたいもの」としてあやかりたいと願った人びとの思いを顕した例は枚挙にいとまが無い(5)。

２．アンケートの概要

まずは、前期特別企画展「立山があるある展」で実施したアンケートについて概要をまとめてみたい。当アンケートは、前期特別企画展「立山があるある展」の開催期間であった令和２年７月18日（土）から同年８月30日（日）まで実施した。対象は、前期特別企画展の入場者全員とした。結果として、のべ1602人から回答を得た。

前期特別企画展「立山があるある展」は、開催時期が７月から８月にかけてであったため、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けた。その最たるものは、ツアー団体客と学校団体（特に小学校）の激減であり、皆無に近い状況であった。小・中学校では、授業時間確保のため夏休みが大幅に縮小されたことに加え、富山市内の小学校をはじめ県内の学校が、例年夏休みに中に実施している立山登山も軒並み中止となった。そのため、立山登山の事前学習や事後学習、雨天中止による代替措置として立山博物館を訪れる小学校は皆無であった。加えて、県外への移動や旅行の自粛ムードが続いていたため、博物館を訪れる人々自体が少なかった。現に、７・８月期の立山博物館の入館者数は、前年度同時期の約半分であった。その影響は前期特別企画展にも色濃く出ることとなった。

しかしその一方で、本当に「立山があるある展」に関心がある人々が多く来館したとも言え、「立山」への思いを持つ人々がアンケートに回答し、その回答には、県内外の人々のなおざりではない「立山」への正直な思いが映し出されていると言えよう。

さて、アンケートの回答者の内訳をみると、男性が812人、女性が784人、未回答が６人であった。また、入場者の県内外の別についてみると、県内在住者は1071人で、男性が516人、女性が555人であった。県外在住者は531人で、男性が296人、女性が235人であった。それぞれの年代別の内訳は次の表の通りである。（表中のデータは、回答しやすさと項目の煩雑さを避けるため、「小学生以下」と「70代以上」の項目を設けた。「小学生以下」に11歳と12歳が入り、「70代以上」には80代と90代が含まれている。）

年代／男女	県内男性	県内女性	県内計	県外男性	県外女性	県外計	年代総計	割合
小学生以下	19	26	45	7	8	15	60	3.7%
10代	25	39	64	2	9	11	75	4.7%
20代	52	56	108	16	18	34	142	8.9%
30代	56	77	133	26	21	47	180	11.2%
40代	107	121	228	66	53	119	347	21.7%
50代	112	107	219	90	61	151	370	23.1%
60代	80	76	156	65	52	117	273	17.0%
70代以上	64	50	114	23	13	36	150	9.4%
年代合計	515	552	1067	295	235	530	1597	※
年代不明	1	3	4	1		1	5	0.3%
合　計		県内合計	1071		県外合計	531	1602	100%

アンケート回答者の年代別の割合は、従来の立山博物館の想定から外れたものであった。入館者は60代と70代が多いと考えていたが、ツアー団体客が皆無になった場合、実は40代と50代が中心となっていたことが明確になった。グラフにすると、50代を頂点としてきれいな山形を形成していたのである。

これは、立山博物館としての新たな発見であり、今後の分析・検討課題であると言える。

３．アンケート質問項目の分析・検討

さて、アンケートに関しては、「立山があるある展」の柱の一つであった企画展担当者（博物館側）と企画展入場者の双方向的な意見交換を意図し、博物館と入場者双方の「私のとっておきの立山」や「立山への思い」、「立山のイメージ」を共有しようという目的があった。そのため質問の回答には、記号選択方式を極力避け、特に立山のイメージについての質問では、博物館が設定した回答を選択する形は採用しなかった。その代わり質問事項についてはシンプルなものとし、①年代、②性別、③県内在住・県外在住、④立山登山の有無、⑤「とっておきの立山」「心の中の立山」の自由記述、の５項目のみとした。「立山があるある展」観覧後に記入してもらうことを考慮し、質問項目も最小限にとどめたつもりであったが、豈図らんや充実した、時間をかけた回答が多かった。以下、回答をいくつかに分類し、考察していきたい。

３－１．アンケート自由記述項目の回答者数とその内訳

まずは、「立山があるある展」アンケートの自由記述項目の回答者について検討してみたい。

自由記述項目の回答者数は、のべ1100人であり、全回答者数1602人の約69％であった。

回答者の内訳は、男性が529人、女性が570人、未回答１人であった。また、回答者の県内外の別についてみると、県内在住者は783人で、男性が351人、女性が431人であった。性別未回答が１人であった。県外在住者は312人で、男性が175人、女性が137人であった。県内・県外在住未回答が５人であった。

それぞれの年代別の内訳は次の通りである。小学生以下が46人で、男性22人、女性24人。10代が60人で、男性28人、女性32人。20代が110人で、男性57人、女性53人。30代が136人で、男性65人、女性71人。40代が248人で、男性129人、女性119人。50代が242人で、男性116人、女性126人。60代が155人で、男性63人、女性92人。70代以上が93人で、男45人、女性48人。未回答者が10人であった。

各年代の県内在住者・県外在住者及び男性・女性の内訳は次の表の通りである。

年代／男女	県内男性	県内女性	県内計	県外男性	県外女性	県外計	年代総計	割合
小学生以下	17	22	39	5	2	7	46	4.2%
10代	19	26	45	9	6	15	60	5.5%
20代	39	42	81	18	11	29	110	10.0%
30代	34	58	92	31	13	44	136	12.4%
40代	74	93	167	55	26	81	248	22.5%
50代	75	86	161	41	40	81	242	22.0%
60代	48	62	110	15	30	45	155	14.1%
70代以上	44	39	83	1	9	10	93	8.5%
年代合計	350	428	778	175	137	312	1090	＊
年代不明	1	3	4	0	0	0	4	＊
性別不明	0	1	1	0	0	0	1	＊
県内外不明	＊	＊	＊	＊	＊	＊	5	0.9%
合　計		県内合計	783		県外合計	312	1100	100%

回答者の割合は、県内在住者が県外在住者を大きく上回り、約71.2％であった。やはり県内在住者の方が「立山」に対して日々さまざまな思いを持ち、思い入れも強いであろうことが予測できた。しかし、全体

の自由記述項目回答者数が、1100人に達したことは驚きであった。加えて比率としての約69％という数字は、過半数を大きく超える予想外のものであった。このことからも、「立山」に対する思いを語りたいと望む、もしくは語ることができる人々の存在の大きさを感じることができた。

３－２．アンケート自由記述項目の回答者における立山登山経験者数とその内訳

さて、回答者1100人のうち立山登山の経験をもつ人々はどのくらいいるのであろうか。自由記述項目回答者のうち立山登山の経験者は、828人で、未経験者は269人、未回答者は３人であった。登山経験者が約75.3%と大変高い割合であった。登山経験者のうち県内在住者は614人、県外在住者は214人で、やはり県内在住者が約74.1％と圧倒的に多かった。県内在住に限った回答者783人の中でも登山経験者は、約78.4％とより高い割合を示した。特に、70代以上の県外在住者で立山登山経験が無いのは83人中３人のみであった。

立山登山経験者の年代別の内訳は次の通りである。小学生以下が、11人で、男性５人、女性６人。10代が、28人で、男性10人、女性18人。20代が69人で、男性32人、女性37人。30代が88人で、男性38人、女性50人。40代が、170人で、男性82人、女性88人。50代が203人で、男性99人、女性103人、性別未回答１人。60代が151人で、男性74人、女性77人。70代以上が102人で、男57人、女性45人。未回答箇所がある人が６人であった。

全回答者の立山登山の経験の有無、県内在住者・県外在住者の内訳は次の表の通りである。

	登　　山				未　登　山				
年代／内外	県内	県外	合計	登山%	県内	県外	合計	未登%	合計
小学生以下	9	2	11	23.4%	30	6	36	76.6%	47
10代	26	2	28	54.9%	19	4	23	45.1%	51
20代	59	10	69	67.6%	22	11	33	32.4%	102
30代	69	19	88	71.5%	23	12	35	28.5%	123
40代	136	35	171	76.0%	31	23	54	24.0%	225
50代	135	68	203	79.3%	26	27	53	20.7%	256
60代	98	54	152	83.5%	12	18	30	16.5%	182
70代以上	80	23	103	95.4%	3	2	5	4.6%	108
年代不明	2	1	3	50.0%	2	1	3	50.0%	6
合計	614	214	828		168	104	272		1100

上の表からも、登山経験者が上の年代になるほど多くなることが明確にわかる。比率についてもまさしく右肩上がりとなっている。特筆すべきは、60 代と 70 代以上の 80％超、90％超の数字であろう。まさに立山登山が県内在住者にとって「当たり前のこと」であったことを示している。当然、立山博物館を訪れ「立山があるある展」を観覧する人々＝立山に普段から関心を抱いている人々、であることは考慮しなければならない。しかし、表中からも登山したからゆえの思いの強さが、各世代、特に 30 代以上の世代にわたって何かを「語らせる」のだということが容易に推測できる。そのような数字が表中で明らかになっていると言えよう。

３－３．アンケート自由記述項目の分析方法

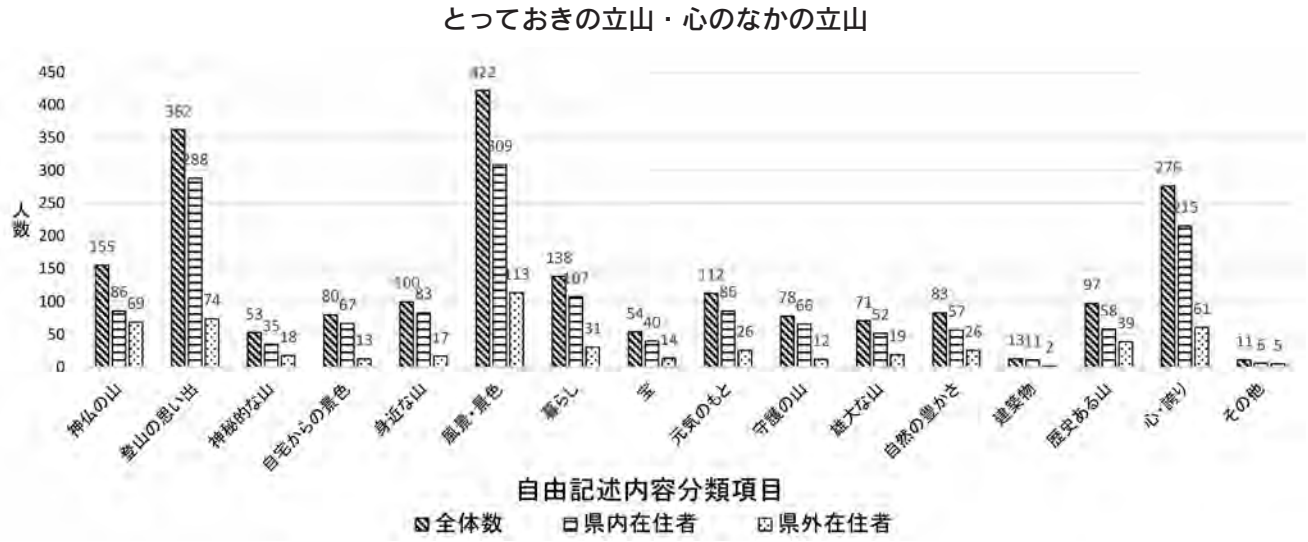
自由記述項目に関しては、「とっておきの立山」「心の中の立山」という漠然とした質問のため、回答が多岐にわたったので、複数のグループ項目を設定し、すべての回答を分類した。例えば、「小学６年生の時の立山登山」といった回答は、「登山の思い出」グループ、「地獄と極楽のある山」という回答は、「神仏の山」グループなどに分類した。なかには、「とっておきの立山」に関係しない記述も含まれていたが、それらは一括して「その他」のグループとした。その結果、グループ項目は次の16項目とした。

・「神仏の山」（神の山、地獄がある山、極楽がある山、霊山、などの回答。）
・「神秘的な山」（神々しい雰囲気、不思議な魅力、神秘の山、などの回答。）
・「登山の思い出」（小学６年生の時の立山登山、家族で登った立山、などの回答。）
・「風景・景色」（氷見から見える海越しの立山、呉羽山から見える立山、などの回答。）
・「自宅からの景色」（自宅から毎朝見える立山、自宅で見る立山が一番、などの回答。）
・「身近な山」（立山が見えることが当たり前、日常生活の中にいつもあるもの、などの回答。）
・「暮らし」（私の生まれたところ、ふるさと、懐かしい急行立山、校歌にある立山、などの回答。）
・「宝」（富山の宝、特別な存在、富山にとって欠かせない山、などの回答。）
・「元気のもと」（心が癒やされる山、心が落ち着く場所、心の糧、元気がもらえる、などの回答。）
・「守護の山」（見守ってくれる存在、守り神のような印象、おかげで災害が少ない、などの回答。）
・「雄大な山」（立山の雄大な姿、雄大な山々、壮大、迫力ある日本一の山、などの回答。）
・「自然の豊かさ」（空気がキレイ、ライチョウ、自然の恵み、素晴らしい大自然、などの回答。）
・「建築物」（立山駅、室堂小屋、立山ケーブルカー、立山黒部アルペンルート、などの回答。）
・「歴史ある山」（立山の歴史の長さ、立山曼荼羅の印象、立山信仰の奥深さ、などの回答。）
・「心・誇り」（心のふるさと、心のよりどころ、自慢の山、富山県民の誇り、精神的支柱、などの回答。）
・「その他」（思いつきません、わかりません、など上記の項目に当てはまらない回答。）

勿論、自由記述であるため、回答のなかには複数の項目に当てはまるものが存在した。そのため、複数回答も可とし、それぞれ当てはまる項目に分類した。その結果、回答数はのべ2105となった。設置した項目と各項目の回答者数の内訳は次の表の通りである。

	神仏	登山	神秘	自宅	身近	景色	暮し	宝	元気	守護	雄大	自然	建築	歴史	誇り	その他
合計数2105	155	362	53	80	100	422	138	54	112	78	71	83	13	97	276	11
比率（%）	7.4	17.2	2.5	3.8	4.8	20.0	6.6	2.6	5.3	3.7	3.4	3.9	0.6	4.6	13.1	0.5
県内数781	86	288	35	67	83	309	107	40	86	66	52	57	11	58	215	6
比率（%）	5.5	18.4	2.2	4.3	5.3	19.7	6.8	2.6	5.5	4.2	3.3	3.6	0.7	3.7	13.7	0.4
県外数314	69	74	18	13	17	113	31	14	26	12	19	26	2	39	61	5
比率（%）	22.0	23.6	5.7	4.1	5.4	36.0	9.9	4.5	8.3	3.8	6.1	8.3	0.6	12.4	19.4	1.6

※表中の表記については、神仏：神仏の山、登山の思い出：登山、神秘的な山：神秘、自宅の景色：自宅、身近な山：身近、景色・風景：景色、暮らし：暮し、元気のもと：元気、守護の山：守護、雄大な山：雄大、自然の豊かさ：自然、建築物：建築、歴史ある山：歴史、心・誇り：誇り、と記した。



上記の表をみると、最も回答数が多かった項目は「風景・景色」、２番目が「登山の思い出」、３番目が「心・誇り」であった。この３項目のみが回答数200を越えており、他の項目に比べ頭一つ抜け出ていた。また、この３項目に続くものとして「神仏の山」が４位、「暮らし」が５位、「元気のもと」が６位であったが、いずれも回答数は100から150ほどであった。

県内在住者と県外在住者の回答を分けてみてみると、県内在住者に限った場合では、トップの３項目は変わらず、順番も同じであった。しかし県内在住者の特色は、４位以下の項目に表れていた。４位に「暮らし」が上がり、「神仏の山」と「元気のもと」が同数で５位となり、「身近な山」も僅差の７位になったのである。やはり、県内在住者にとって「立山」は「暮らし」のなかに息づく「身近な山」なのだということがわかる。県外在住者に関してみると、トップの３項目にも変化があった。１位の「風景・景色」と、２位の「登山の思い出」は変化がなかったが、３位は「神仏の山」であった。このことは想定内で、「立山」を「心・誇り」と感じるのは富山県民ならではの感情だと思われた。しかし、その「心・誇り」が僅差の４位であったことには驚きを覚えた。勿論、富山県内で生まれ育ち、県外に住んでいる人々もいることを考慮に入れなければならないが、県内の人々からみても「立山」は富山県、富山県民にとっての「心・誇り」と思われていると言えよう。続く５位が「歴史ある山」、６位が「暮らし」であった。ここからも、「立山」が「歴史がある山」で、富山県民の「暮らし」のなかにあり、それを富山県民が「心・誇り」として感じている、という県外の人々の見方がわかる。

４．分類項目のなかの各回答の傾向と分析

次に、アンケートの自由記述を分類項目毎に分け、その内容についてみていきたい。ここでは、各分類項目内の主な回答の傾向を探り、その回答から窺える「立山観」について分析していきたい。

分析方法としては、回答数が多いもののなかのキーワード、各年代別の回答数及び男女比率、回答のなかの共通した内容、などを抽出し、検討していきたい。そして、現代の人々が抱く「立山観」について迫っていきたい。

４－１．「風景・景色」・「自宅からの景色」のなかの回答からみえる「立山」

最も回答が多かった分類項目である「風景・景色」と、景色という類似点から「自宅からの景色」の２項目から検討していきたい。両項目の回答数はのべ502であり、割合では全体の23.8％にあたる。約４分の１

の人が、立山の景色に魅了され、特別な思いを抱いていることになる。次に、各年代別の回答数及び男女比率、立山登山経験者の比率についてまとめた。結果は、次の表の通りである。

年代／男女	男性	女性	合計	県内男性	県内女性	県内合計	県内割合	未登山	未登割合
小学生以下	10	11	21	9	10	19	90.5%	15	46.9%
10代	5	14	19	5	13	18	94.7%	9	27.3%
20代	20	23	43	19	18	37	86.0%	12	18.2%
30代	20	38	58	15	32	47	81.0%	17	17.7%
40代	40	64	104	30	42	72	69.2%	26	15.5%
50代	57	58	115	35	42	77	67.0%	18	10.4%
60代	33	39	72	23	30	53	73.6%	8	7.2%
70代以上	18	21	39	14	17	31	79.5%	0	0%
年代不明	1	0	1	1	0	1	＊	1	＊
県内外不明	＊	＊	＊	0	1	1	＊	＊	＊
合計	204	268	472	151	205	356	75.4%	105	100%

総数472人のうち、県内在住者は男性が151人、女性が205人の合計356人であった。これは、約75.4％という高比率になっている。各年代を検討していくと、小学生以下と10代が、90.5％と94.7％と90％を越えている。それが20代と30代では80％超に変化し、40代と50代では、60%台になっていく。そして60代と70代以上では70％超で80％台に迫ってくる。この割合の変化は、人々は「立山」を「風景・景色」の特別な存在感としてまず認識し、知識が増えるにつれて「風景・景色」以外の「とっておきの立山」を持つようになるが、最後はやはり「立山」の「風景・景色」に回帰していくという思考の流れを表している。

令和２年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、県外からの観光客が激減し、県外在住の入館者も少なかったことは考慮に入れなければならないが、やはり、県内各地から眺めることができる、いつもそこに在る「立山」の特別な存在感に格別な思いを致す県民が多い証左と言えよう。

さらに、「立山」の「風景・景色」について特徴的なデータとして、山中や登山途中、頂上からの「風景・景色」の回答が少なかったことが挙げられる。「風景・景色」と「自宅からの景色」の総回答数502に対し、97 回答に過ぎなかった。比率にして約19％である。「立山」での登山未経験者が多数だった可能性があるが、上記の表を参照すると、登山未経験者は105人、全体の約22％の割合であった。小学生以下と10代では、46.7％と 27.3％と高い割合を示しているが、20代以上になると80％以上が登山経験者である。さらに、60代では90％を越える非常に高い割合になり、70以上では、100%登山経験者であった。

これは、「立山」の山中の名所や頂上からの眺望が大きな割合を占める、と考えていた推測から外れていた。以下に述べるものは、山中の名所や頂上からの眺望を挙げた回答内容の代表例である。（アンケートから抽出。以下、アンケートの内容については同様である。）

・雄山山頂でカップヌードルを食べながら眺める、広大な室堂の景色。
・室堂から見る立山の姿。平地とは何もかもが違う別世界といった趣。
・弥陀ヶ原あたりの景観。真っ青な空と鮮やかな山の緑のコントラストが忘れられません。
・夏の登山風景。頂上からみる雄大な景色、美しさ。雄山神社峰本社から見る富山平野、富山湾。
・弥陀ヶ原の星空。みくりが池温泉から見えた星空。3,000mの観光地。日本のスイス。
・雷鳥沢から見る立山が素晴らしい。雪化粧した山並みと富山市の街の風景
・雄山頂上から見下ろす雲海が好きです。雄山からの 360°のパノラマ。

・雷鳥沢キャンプ場で過ごした時に望む夕景、朝の澄んだ空気の中で仰ぐ峰峰に心を打たれます。
・奥大日から見た弥陀ヶ原等の大地のうねりを感じられる景観が忘れられない。
・浄土山から室堂の箱庭のような美しさが目を閉じると目に浮かぶ。

次に、80％以上を占めた大多数の回答について検討したい。この回答内容は、「立山」を平野部から見た「風景・景色」について指摘している。「立山」の姿というと、テレビや新聞などマスコミで取り上げられたり、ポスターや広告などで使われたりする「風景・景色」が頭に浮かぶ。例えば、「雨晴海岸から海越しに望む立山連峰」や「呉羽丘陵から望む立山連峰」などがそれに当たるであろう。アンケートの回答についても、そのような「立山」の「風景・景色」が数多く集まるのではないかと仮説を立てた。しかし、結果は予想外のものであった。回答内容から浮かび上がった「とっておきの立山」の「風景・景色」は本当に多種多様であり、まとめて分類することが困難なほどであった。敢えて分類した結果、最も多かったものは「自宅からの景色」で、回答数80、比率にして 19.8% であった。これらの数字は、他の回答と比較すると圧倒的な多さであった。次に挙げたものは、回答の代表例である。

・家から見える晴れた日の立山。自宅から見える立山連峰。
・能登出身のため、立山は晴れた日に海の向こうに見える山でした。
・朝日に目を覚まされ、窓を開けるとそこに立山。毎日窓から見える山、季節を感じます。
・朝起きた時、家の窓から立山が見えると、一日すがすがしい気持ちで過ごせます。
・私の住んでいる街から見る立山連峰がいちばん美しく見えると思っています。
・自宅から毎日（晴れていれば）見えてすがすがしく思っています。家から見える立山に癒やされています。
・朝、我が家の玄関から立山連峰が見えるとその日一日がとても充たされるような気がします。
・地元の芦峅寺に住んでいます。夕日でピンク色に染まった立山は最高です。青空と雪の立山も絶景です。
・朝窓から見えるので、いつも手を合わせています。自宅から見る立山の姿に改めて感動を新たにします。
・富山市内在中。マンションから見る立山元日の日の出が一番好きです。一年の始まりを感じます。

これらの回答を検討すると、次の２点が浮かび上がってきた。まず、地域的な視点でみると、地域に偏りがないことが特徴であった。「立山」が見える地域（可視領域）に満遍なく回答が分散していた。「立山があるある展」では、県内の４地区（新川・富山・高岡・砺波の各地区）から見える「立山」の姿がそれぞれ異なることを紹介した。つまり、富山県民にとって「立山」の姿は、決まり切ったステレオタイプなものではなく、県民一人一人が自らの心に持っている姿だと言えよう。

次に、各人が自分の眺めている「立山」の姿に満足している、踏み込んで言えば一番美しく、感動的な姿だと確信する気持ちがあることが特徴であった。まさに、「おらが町の立山」、もしくは「お国自慢の立山」といった思いを読み取ることができた。それ故に「私の住んでいる街から見る立山連峰がいちばん美しく見える」という誇らしい気持ちや、「朝、窓から見えるので、いつも手を合わせています。」という畏敬の念の記述に繋がっていると考えられる。

さて、その他の回答についてみていくと、確かに多種多様ではあるが、共通点もあることがわかった。次にそれらの代表例を挙げて検討していきたい。

・学校帰りに見る立山（夕方）。早朝ランニング中に見る立山。
・心の中の立山は、幼少期通学路で見ていた立山です。
・出勤時、朝日を背に雄大に立つ立山連峰。
・東京勤めから富山に戻ってきた時、職場のベランダから見えた立山連峰が印象的だった。
・学生のころ、県外から帰省するたびに家から見える立山を見てホッとしていました。
・８号線をドライブするときに、だんだんと近く大きくなっていく立山連峰が大好きです。
・学校のまどから見えた美しい立山が好きでした。明日雨だけど好きでした。
・神通大橋を通るときに見える大きくて白いきれいないつもの立山

・高速道路から見える立山が好き。毎日見てもきれいに見えると未だに感動する。なくてはならない存在。
・北陸新幹線から見える立山は富山に「帰ってきた」と感じる。「立山連峰が見えています。」とアナウンスしてくれる車掌さんだと嬉しくなる。
・仕事や生活に疲れた時、立山の雄大な姿を思い浮かべます。
・富山マラソンの際に、新湊大橋を渡っている最中に見た立山が美しかったです。
・帰宅時、８号線を通ります。橋の上から夕陽を背に迫り来る山々を前に車を走らせると悩んでいたことや疲れも吹き飛びます。また明日も頑張ろう！という気持ちにさせてくれます。
・自宅近くの散歩コースにいくつか「立山のビューポイント」があり、これが「とっておきの立山」です。
・毎朝ウォーキングをしながら水橋より白岩川ごしに立山のすみからすみまでゆっくり眺めております。

上記の回答からみえる共通点は、人々にとって「立山」が生活に根ざしているということである。回答の内容は多種多様であるが、それは人々の生活が十人十色であるからであり、生活のなかで「立山」を感じ、思いを致す場面がさまざまだからである。しかし、生活のどこかの場面で「立山」に思いを致していることは共通している。それらの思いは、「立山」への誇りや、畏敬の念、親愛の情さえも持っていると言えよう。それは次の回答からも窺える。

・自分の故郷は美しい山が見える、ということを思い出した。
・当たり前すぎて普段は意識しないが、天気が悪くて見えない時に「今日は立山が見えなくて残念だな」と思うような対象。家族みたいなものでしょうか。
・毎日の散歩で、今日も一日ありがとうございましたと、立山に向かって手を合わせるのが日課です。県民にとってそこに在るのが、心の中の立山では？立山が見える。ただそれだけで有りがたいと思う。

このように人々の日常生活において、そこに在るのが当たり前の存在、それが「立山」であり、さまざまな生活場面における色々な思いが、「立山」に繋がっていると言える。そして、繋がりようによって「立山」は誇りにも、畏敬の念を抱く存在にもなるのである。

この思いは大伴家持が詠んだ歌にも繋がっているだろう。家持の越中において詠んだ歌の多くは、越中の山河壮大を見事に詠みきった歌であると言われる。日本古典文学大系『万葉集』の解説においても「珍しい土地の自然に接した彼の新鮮な感動を察することができる」と記されている(6)。家持は「立山の賦」に限らず、越中国で訪れた各地から見た「立山（タチヤマ）」を詠み、その神々しい峰々に感動し、礼賛している。この気持ちは、まさしく1200年の時を超えて現代に繋がっていると言えよう。

最後に、回答者が勧めるビュースポットを紹介したい。参考にしてもらえると幸いである。

・立山をバックに田んぼの中を走る地鉄電車。
・富山市の神通大橋から見る立山。
・北大橋から（富山駅方面へ向かう時）みえる立山大好きです。
・富山市役所展望台や、呉羽山山頂展望台など、晴れた日によく眺めに行きます。
・大山上野台地から見る立山がどの眺望より最高です。
・冬の晴れた日、草島線から見える立山が最高に好き。
・魚津のしんきろうロードから見える立山連峰と海が印象的でした。
・雨晴海岸より見える立山連峰。
・８号線で、富山から水橋あたりに向かっていく時に正面に見える雄大な立山の姿が好きです。
・庄川の中田橋を渡った時に見える立山連峰。真正面が剱岳になっている。
・氷見から見た海越しの立山。氷見からみる冬の立山
・常願寺川の堤防上から見る立山の美しさが一番だと思います。
・神通川を渡る橋から見る晴れた日の立山連峰。
・東京便から見る朝の立山。

・冬の立山連峰を黒部市～高岡市まで鉄道で見たこと。
・八尾高校の桜並木の道から見る冬の夕焼けに染まった立山はとてもキレイです。
・立山町大森からは立山連峰すべてよく見えて、素晴らしい所です。

４－２.「登山の思い出」のなかの回答からみえる「立山」

次に２番目に回答が多かった分類項目である「登山の思い出」について検討したい。この項目の回答数はのべ362であり、割合では全体の 17.2％にあたる。しかし、立山登山経験者が828人であることを考えると、43.7％と半分近い比率の人が、立山登山について格別な思いを抱いていることになる。次に、各年代別の回答数及び男女比率についてまとめた。結果は、次の表の通りである。

年代／男女	男性	女性	合計	県内男性	県内女性	県内合計	県内割合
小学生以下	2	7	9	1	7	8	88.9%
10代	8	3	11	7	3	10	90.9%
20代	9	12	21	9	3	12	57.1%
30代	22	18	40	11	12	23	57.5%
40代	34	37	71	15	22	37	52.1%
50代	42	46	88	14	28	42	47.7%
60代	41	41	82	15	24	39	47.6%
70代以上	20	20	40	13	15	28	70.0%
合計	178	184	362	85	114	199	55.0%

総数362人のうち、県内在住者は男性が85人、女性が114人の合計199人であり、比率としては、約55％であった。各年代を検討してみると、小学生以下と10代が約90％と高い数値になっている。これは、富山県内の小学校で６年生が立山登山をしていることに大きく関わっているであろう。なぜならば、10代が立山登山を経験したと考えられる。2013年（平成25）には、県内で登山を実施した小学校は142校であり、立山登山を実施した小学校は93校であった。これは約65％の比率であった。富山県において立山登山を実施する小学校の比率は、2007年（平成19）以前、約50％台を推移していた。しかし、2008年（平成20）以降は、その比率は60%を越え、近年は70％に迫る年もあるほど毎年60% 台後半を維持し続けている。富山市の小学校に限っては、約90％の非常に高い割合となっている(7)。一方、20代と30代は約57％、40代は約52％、と50％台に減少する。50代と60代に至っては、約47％と50％に達しない数値となっていた。しかし、70代以上では約70％と回復している。

このことから、小学生以下と10代では、県内在住者が多いため立山登山の印象が強く、20代以降は県外在住者が増加し、彼らが立山登山の思い出を語ることが多くなったため、割合としては減少したと言えよう。その証左に、20代から60代までの総人数は突出して多くなっている。特に40代から60代にかけて顕著である。また、20代以降の県内在住者の立山登山経験の有無を調べてみると、登山未経験者は合計10人であり、割合としては５％であった。しかも、未経験者が述べた思い出は「立山登山ができなかった」というものであった。このことからも県内在住者にとっての「立山登山」の存在感の大きさを感じることができる。次に挙げたものは、それらの代表例である。

・小学６年生の時、学校の行事で登山してみて、とても迫力があって、立山は日本一の山だなと思った。
・小学校の頃、天候不順で登頂できなかった。クラスメイトと再び訪れました。今となればいい思い出。
・小学生で初めて立山に登り切った時の達成感が忘れられず、今でも心に深く刻まれています。

・実際に登った時の景色がまず一番に思い浮かびます。平地とは何もかもが違う別世界といった趣。
・小学校の時に立山登山した時のつらかった思いと、その時見た景色が思い出された。
・小学生の時の立山登山、息子がアレルギー持ちで立山登山に付き添いで同行して、雄山に登ったこと。
・立山登山し、山小屋で一泊した時に夜空を眺めながら飲んだビールが最高でした。
・子供の学校行事である立山登山。一ノ越までがなかなかきつく、大変であったが、頂上まで登ると、また来たいという気持ちが湧いてきた。苦しみ、大変さ、楽しさ、喜びのある立山登山でした。
・小６の立山登山。主人と二人で登った20歳の登山。６歳と４歳の娘と登り、次女を背負っての登山。亡き主人の姿が思い出されます。
・中学生の時、立山登山がありましたが祖母の死で登ることができず、成人登山で初めて登山。節目での登山で思い出の山です。

上記の回答から、「立山登山」が強く思い出に残るできごとであったことが窺える。それは、人生の節目での登山になっていることも大きく影響しているように思う。小学校を卒業する年、成人儀礼としての登山など、登山の辛さと人生の節目が表裏一体となって、強烈な思い出を醸し出し、心に刻まれていくと考えられる。

４－３.「心・誇り」のなかの回答からみえる「立山」

回答のなかで県内在住者の比率が最も大きかった分類項目である「心・誇り」と、心情という類似点から「宝」の２項目から検討していきたい。両項目の回答数はのべ330であり、割合では全体の15.7％になる。約６分の１の人ではあるが、その回答の内容は濃く、立山への愛情に溢れているものが多く見られた。

各年代別の回答数及び男女比率、県内在住者の男女比率についてまとめた。結果は、次の表の通りである。

年代／男女	男性	女性	合計	県内男性	県内女性	県内合計	県内割合
小学生以下	3	3	6	1	3	4	66.7%
10 代	6	6	12	6	4	10	83.3%
20 代	10	10	20	8	8	16	76.2%
30 代	14	16	30	11	14	25	83.3%
40 代	24	28	52	20	25	45	86.5%
50 代	33	38	71	28	31	59	83.1%
60 代	25	23	48	17	18	35	72.9%
70 代以上	14	18	32	13	16	29	90.6%
年代不明	1	3	3	0	3	3	＊
性別不明	＊	＊	1	＊	＊	1	＊
合計	130	145	276	104	122	227	82.2%

回答数276のうち、県内在住者は男性が104人、女性が122人、性別未記入１人の合計227人であり、比率は、約82.2％であった。やはり予想通り、県内在住者が大多数を占める結果となった。各年代を検討してみると、小学生以下が66.7％、20代と60代が70％台であるが、その他の年代はすべて80％を越え、70代以上では約90％と高い数値になっている。また、回答数も小学生以下から20代と、30代以上を比較すると30代以上では２倍以上の数値が並んだ。勿論、これは「立山」への思いが、富山県に長く住むほど高まっていくことを示しているだろう。また「立山」を目にする機会の多寡、「富山県のシンボル、立山」のような宣伝文句を耳にする回数なども影響していると思われる。つまり、「立山は富山県の誇り」という心情を長期間にわ

たり刷り込まれてきていることが大きな要因と言えるかもしれない。しかし、それだけでは片付けられないように思う。なぜならば、刷り込みが要因と考えるならば、小学生はじめ子供の方がより強く感じるであろう。加えて、機械的に思い込まされたものであるならば、回答数においてもより多くを占めたはずである。最多回答数を予想していた仮説は裏切られた。そして、何より回答の内容が予想と異なっていた。

予想した仮説では、「富山県の誇り」や「富山県の宝」などといったワンフレーズの回答が多いのではないかと考えていた。しかし、実際に回答内容を検討してみると、ワンフレーズの回答よりも理由や背景までも述べた回答が数多くあった。このことからも県内在住者の「立山」への思いの大きさを感じることができる。次に挙げたものは、それらの代表例である。

・富山の顔であり、富山の誇りだと思います。美しい自然は変わらない物ではあるが、人間が行える小さな力（協力）で出来るだけ支えて行けたらと思いました。富山大好き !! です。
・もし、立山がなかったら富山は何になるのだろうと考えましたが、何も出てきませんでした。立山があることで富山があるのだと思いました。
・古代から文芸を生み出す場であった立山を仰いで育ったことに誇りを持っております。
・生まれてくる子供の名前に、立山から一文字もらう予定です。
・県外で12年暮らしていましたが、富山の風景を思い浮かべると、必ず立山がありました。白い雪が積もる立山も、青く透き通るような立山も心の中にいつもあります。
・小生が小学生の時分に登ったことがあり、当時見た山頂からの景色が今も心の中に生きており、どこに行こうと心の故郷として立山があります。
・富山市役所展望台や、呉羽山山頂展望台など、晴れた日によく眺めに行きます。そこにある「山」ですが、富山の民には無くてはならない山だと思います。
・あたりまえに見えていたけれど、大人になったら大切に思える立山。子どもたちにも伝えていきたい。
・改めて偉大な山だと感じました。立山がある県で生活できることを誇らしく思います。
・学生のころ、県外から帰省するたびに家から見える立山を見てホッとしていました。富山に帰ってきたと感じることのできる代表的なシンボルです。
・ずっと当たり前のようにある山ですが、年を重ねていろいろな場所に出かける中でこの景色がより美しく感じます。ふるさとの自慢だと思います。
・身近にあって普段意識することはないのですが、今日は改めて立山の偉大さを知ることができました。
・進学と就職のため、しばらく富山を離れていました。そのためもあってか、家から見える立山や、どこに出かけても見える立山がとっても美しくて愛しくて「あー、帰ってきてよかったな」と常々思います。
・うれしいとき、悲しいとき、折々の節目の時にふと目をやると、立山連峰が遇然にも美しい、という不思議な経験をしています。そんなとき、あー、富山県民だな、としみじみ思います。いつも立山とともに歩んでいるなと思います。
・ふるさとの風景＝立山。職場の窓から立山が見えます。一年中見ていても飽きません。富山を離れる人にとっても、忘れて欲しくない風景です。

上記の回答からみえてくることは、「立山」を「富山県の誇り」として感じる思いには、さまざまな背景があるということである。それ故、ワンフレーズだけでは物足りず、その理由も述べたくなるのであろう。そこにはステレオタイプには収まらない熱い思いが感じられる。まさに十人十色と言える。それは、ワンフレーズの回答内容においても同様であった。たかがワンフレーズの回答だが、当を得た、強い言葉が並んだ。例えば、次のようなものである。

・立山は富山県民の心のよりどころ。立山の景色は自慢。
・無いと困ります。あってあたりまえ。富山の誇りです。
・失うことができない富山県の象徴。

・県民の精神的支柱である。
・富山県民にとって立山連峰は心のふるさとです。今現在も生活すべての中心にあります。
・背中を支える心の背骨みたいなもの。
・立山は郷土富山の誇りです。高く、清くの心です。
・立山のおかげで他県へ移住する気は無く、今まで過ごしています。
・晴れた日に立山が見えた時、富山県に生まれてよかったなぁと思う！
・心の支柱です！富山に生まれて〝しあわせ〟そして〝ほこり〟です。

上記のように、ワンフレーズの回答にもそれぞれの思いが色濃く滲み、独特な表現もみられる。なかでも「宝」と表現した回答は、その最たるものであろう。「誇り」や「心」に関わるフレーズが多数を占めるのではないかと仮説は立てていたが、誇張して聞こえる「宝」というフレーズはそれほど多くはないと考えていた。しかし、「宝」は、回答数 54、「誇り・心」と合わせたなかでは比率にして 16.4% であった。これらの数字は、「誇り」など他の回答と比べ、最多の回答数であった。次に挙げたものは、代表例である。

・災害などからいつも守ってくれる存在で、私たち富山県民の宝だと思っています。
・毎日見てもきれいに見えると未だに感動する。なくてはならない存在、宝。
・私たちにとってそこにあるのが当たり前なのですが、とても幸せなこと（宝物）ですね。
・「立山」　富山にとって一番の宝です。くっきり見えた日の立山は最高の幸せのおくりものです。
・立山が見える。ただそれだけで有りがたい、宝と思う。

これまで検討してきた回答からみえる共通点として、「立山がそこに在る」ことと、「立山が無くてはならない、不可欠な存在」という２点の心情が窺える。この２点を基本的な心情として、「立山」を「富山県の誇り・自慢」や「富山県民の心のよりどころ」、「富山県の宝」といった各人の心にしっくりくるフレーズで表現されていると感じる。やはり、人々の日常生活において、そこに在るのが当たり前の存在、それが「立山」であり、その「立山」に繋がる各人の心情によって「立山」は「誇り」にも、「宝」にもなる存在だと言える。

４－４．その他の上位回答からみえる「立山」

ここまで回答数上位の３項目について検討してきた。この３項目に続く項目は、「神仏の山」が４位、「暮らし」が５位、「元気のもと」が６位であった。これらについて検討し、「立山」についてより多角的に捉えてみたい。また、「暮らし」の項目には、類似した項目である「身近な山」を加えて検討した。

各年代別の回答数及び男女比率、県内在住者の男女比率についてまとめた。結果は、次の表の通りである。

	神仏の山			暮らし・身近な山			元気のもと		
年代／男女	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
小学生以下	6	4	10	3	3	6	1	1	2
10代	1	7	8	2	6	8	1	0	1
20代	9	8	17	10	15	25	5	8	13
30代	8	12	20	8	20	28	2	9	11
40代	17	12	29	17	26	43	5	15	20
50代	21	12	33	24	25	49	12	17	29
60代	14	12	26	9	7	16	7	17	24
70代以上	4	7	11	10	11	21	3	9	12
年代不明	1	0	1	0	1	1	0	0	0
合計	81	74	155	83	114	197	36	76	112

４位の「神仏の山」の項目については、立山信仰の影響が大きいと考え、上位に位置することを予測していた。結果的に予測通りに見えるが、背景は異なっていた。「神仏の山」の回答内容を検討すると「立山信仰の山」ではなく、「立山の地獄と極楽に興味を持った」「立山が神の山だと初めて知った」という驚きや興味を述べるものが多かった。そこで、「立山」を「神仏の山」だとは知らなかった回答数を調べたところ、92回答（155回答中）が当てはまり、59.4％の割合であった。これは小学生以下から20代では、80％以上という高い比率であり、30代以上では約50％台となっていた。これは、30代で立山信仰について学ぶ機会が数多くあるとは思えないため、20代までに学んできたことに改めて関心を抱いたという可能性が高い。「歴史ある山」の項目でも48回答（97回答中）が、開山伝説をはじめとして立山の歴史について知らなかった。これも約50％の割合であった。

上記のことから、当館が開館から長期にわたり実施してきた立山の歴史や立山信仰についての講座・講演会の意義を再発見することとなった。そして、小学校を中心に実施している立山の歴史や文化についての出前講座をより充実させ、小学生が関心を持ち、学びたいと思ってもらう重要性を再認識した。加えて、2014年（平成26）より郷土史教育に取り組む高校生にも伝えていくことが必要になってくると思われる。

５位の「暮らし」の項目については漠然とした分類のため、さまざまな回答があると予想した。やはり回答内容は、予測したとおり本当に多種多様であった。その中で敢えて分類せずとも明確に多数となっていた回答が２つあった。まずは「校歌」である[8]。回答数138の中で38、比率にして27.5％と４分の１を超える割合であった。例えば、次のようなものである。

・出身中学校の校歌に「立山」が入っており、展示を見てなつかしく思った。
・学生時代、小中高と校歌を歌い続け、「立山」という言葉を当たり前のように使ってきました。
・校歌すべてに「立山」が入っていたことが分かり、少し感動しました。
・小中高とも立山から始まる校歌でした。
・県民の歌、小学校・中学校・高校と必ず立山の言葉が入っていました。

しかし、この「校歌」を遙かに超える回答が「いつも見る風景」、「いつもそばにあり、無くてはならないもの」、「日常生活の中にいつもあるもの」、「在って当たり前の山」という「身近な山」に関わる回答であった。「暮らし」と「身近な山」の２項目を合わせた回答数238の中で、回答数100、比率にして約42％という高い数値であった。これらの数字は、他の回答と比較すると圧倒的な比率であった。やはり、入学式や卒業式など、印象深く記憶に残る節目の式に歌うことが多い校歌と、県内各地から眺めることができる、いつもそこに在る「立山」の特別な存在感に、特別な感情を抱く人々が多いと言えるだろう。

特別な感情という観点では、６位となった「元気のもと」は、富山県民ならではの感情と言える。勿論、県外在住者の回答も入っている。しかし、その回答の多くは「立山」に登って「心が癒やされる」「元気になる」というものであり、日常的な場面での感想とは言えない。一方、県内在住者の回答をみると、日常的な場面や、人生の節目などでの感想が大多数を占めた。次に挙げたものは、それらの代表例である。

・立山が美しく見えると、幸せでいい気分になる。
・日頃から見る立山連峰は癒やし。嫌なことも、モヤモヤした気分もすっきりした気持ちにしてくれる。
・朝起きて、くっきりと迫るように見える立山の美しい姿は一日を元気に過ごすエネルギーをくれます。

上記のように、県民にとって日常生活の中で癒やしや心の活力となる存在が「立山」であると言える。また、このような県民独特の感情は、「守護の山」項目の回答内容もあてはまる。回答のなかには「富山を見わたす守り神」、「常に富山を守ってくれる存在」、「立山のおかげで台風などの災害がなくてとても住みやすい」、「地震や台風から立山が守ってくれる！という絶対的な立山信仰」、といったものが多かった。回答数は78で、比率は 3.7％であったが、まさに富山県民ならではの「立山観」と言えるだろう。ただし、立山連峰が屏風のように存在することで、長野県側から来る台風や低気圧の進路を変えることはあっても、冬の大雪の一因になっていることもあり、科学的には必ずしも「災害から守ってくれる」とは言えない[9]。

以上、回答数４位から６位までの項目について検討してきた。結果として、上位３位までと比較すると富山県民が抱く独特の心情が色濃く表れてきた。「立山」の地獄と極楽に興味を抱き、日常生活のなかの一場面で眺める「立山」に元気をもらい、癒やされる。そして、そんな「立山」を守護神のごとく感じる。このような富山県民ならではの「立山観」が見えてきた。

まとめ

今回、企画展「立山があるある展」の観覧者を対象にしたアンケートを基に現代の「立山観」について考察した。アンケートの回答内容を16項目に分類し、回答数が多かった項目を中心に検討することで、富山県人の心に大きな存在感を持つ「富山県のシンボル、立山」というあり方（＝「立山観」）とは何かについて探った。その結果、「立山」とは、「立山」に思いを致す各人の生まれた風土や生き方が詰まった「言葉」を紡ぎ出すアイテムであり、特に「富山県民（人）らしさ」を引き出すものだと気付いた。アンケート対象者の内なる思いを表出するスイッチが「立山」であり、それぞれの心の中に染み込んでいる立山のイメージの総体こそが「立山観」なのである。その証左に、アンケートの自由記述回答に協力してくれた1,100人のうち、回答が一文だけでなく、回答の理由や、回答にまつわる思い出などを記述した人は、全体の約66％にあたる727人にのぼった。県内在住者に限れば558人（781人中）であり、約71％という高い比率であった。

「立山」の景色を美しいとだけで片付けず、眺めた場面や状況、心情にまで言及することは、『万葉集』の大伴家持の歌に相通じるものがある。まさに1200年の時を経た現代との繋がりと言えよう。景色だけに限らず、その他の項目においても同じような回答内容が多くあった。次に挙げるものは、代表例である。

- 歌を歌いながら立山を眺めて山の名前を覚えられたらいいなぁと思い、NHK ラジオ富山人に提案して「立山連峰のうた」が生まれました。子供たちや大人、みんなで歌って、富山県民が山の名前を子や孫に伝えていける。これが私の夢です。
- 郷里を離れて、改めて立山＝富山という思いを強くしたのですが、それは何だったのだろうと深く思うこともなくモヤモヤしていました。しかし今回よくわかりました。やはり、小さい時から校歌で慣れ親しんでいたのですね。
- 高校生まで富山で育ったので、立山連峰は私の原点であり、「心のふるさと」です。いろいろな思い出が立山にリンクしています。
- 食物アレルギー持ちの息子の学校登山に付き添い、自分自身の学校登山以来の雄山に息子と登ったこと。同級生から遅れてしまったが、皆が頂上にいる間に登頂でき、息子の友達と万歳をしたこと。涙がでそうになった。
- 三人兄弟の末娘が小学１年生になるのを待って、家族で登った立山。下り道、身の軽い子供がコロコロ山を下りる時、転ばないか心配していた母。途中、幼い私をおんぶしてくれたたくましい父を思い出す。
- 朝夕立山を眺め育った 88 年の生涯です。今も立山連峰を画題として制作している。生涯立山と共に生きたい。
- ２年前、入院していた病室から毎朝日の出を見て、元気をもらっていたことを思い出す。

上記のように、「立山」を介しての「自分の物語」は、夢や望郷の念、思い出や決意など幅広い範囲にわたっている。このことは、「立山」が人々の心に特別な存在感を持って在ることに加え、人々の人生に深く関わっているからではないだろうか。人生の節目はもちろんのこと、毎日のごく日常的な場面にすらも「立山」が登場する「いつもそこに在る」存在感、さらに踏み込んで言えば、各人の「ふるさと」の心象風景に「立山」が深く染み込んでいるのである。それ故、「立山」を「誇り」、「宝」、「守護神」などと表現する独特な心情が生まれてくると思われる。まさに、「立山」の雄大な姿こそが、人々を「富山県民（人）」たらしめる、か

けがえのないアイデンティティーの源泉とも言えるだろう。

今回のアンケートの結果では、「景色」が最多回答数であった。しかし、その内容を検討すると「おらが町の立山」、「お国自慢の立山」、もっと言えば「おらが立山」といった思いが強く表れていた。それらから生まれる誇らしい気持ちや畏敬の念は、その他の項目の回答にも共通するものであった。つまり、「立山観」とは、立山の実景観ではなく、各人がそれぞれの人生を歩むなかで抱いた夢や蓄積した知識、体験や思い出を昇華して形成した、一人一人の心象風景だと考える。「富山県のイメージ、立山」とは、このような我々の一人一人の心象風景の総体であり、そのため各人の心に違和感なく入っていくのであろう。「立山」は、各人の心象風景をすべて受け入れる、その雄大な姿同様にまさしく懐の深い存在なのである。

［註］

（１）森山義和「富山県内小・中・高等学校の校歌における「立山」に関する一考察」（『研究紀要』26号、富山県［立山博物館］、2019年）

（２）「立山観」の変遷については、高瀬重雄『立山信仰の歴史と文化』（名著出版、1981年）、廣瀬誠『立山のいぶき』（シー・エー・ピー、1992年）、米原寛「文学にみる古代・中世の地獄思想と立山」（『研究紀要』16号、富山県［立山博物館］、2009年）、奥澤真一郎「文学にあらわれた立山－『金草鞋』と『諸国名山往来－」（『研究紀要』20号、富山県［立山博物館］、2012年）、米原寛「文学にみる立山－古代から近世まで－」（平成24年度特別企画展「文学にみる立山」展示解説書所収、富山県［立山博物館］、2012年）、平成24年度特別企画展「文学にみる立山」展示解説書（富山県［立山博物館］、2012年）他の文献を参考とした。

（３）森山義和「立山における明治前期の諸相」（平成30年度特別企画展「立山の明治維新－継承、そして創造－」展示解説書所収、富山県［立山博物館］、2018年）、令和２年度特別企画展「立山があるある展」展示解説書（富山県［立山博物館］、2020年）

（４）令和２年度特別企画展「立山があるある展」展示解説書（富山県［立山博物館］、2020年）30頁～36頁

（５）令和２年度特別企画展「立山があるある展」展示解説書（富山県［立山博物館］、2020年）28頁～32頁

（６）『日本古典文学大系７　萬葉集四』（岩波書店、1962年）

（７）データは富山県教育委員会による。

（８）富山県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校については、令和２年度に複数の学校再編が実施された。それ故、令和２年度末現在の県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の校歌の歌詞に「立山」がある学校について再調査を実施した。その結果については、別掲の表１を参照。

（この調査における「立山」とは、「立山」そのものだけでなく、「立山連峰」、「北アルプス（アルプス）」、「太刀の山（太刀の峰）」など立山連峰を想起させる文言や『万葉集』に歌われた山の呼び名等も「立山」として集計し、「立山」の歌詞の中に含める。但し、「山」や「紫の山」など、どの山を指すのか特定できない「山」とだけ表された歌詞は対象外とする。）

また、1947年以降の学制改革によって発足した新制小学校・中学校・高等学校・特別支援学校・高等専門学校を対象に、校歌の歌詞中に「立山」がある学校数を調査した。管見できたなかでは、学校数総計663校（内訳　国・公・私立小学校384校、国・公・私立中学校130校、国立高等専門学校・公・私立高等学校及び国・公・市立特別支援学校149校）のなかで、のべ387校で、約58％の比率であった。

校種別にみると、国・公・私立小学校では、384校中207校で、53.9％。国・公・私立中学校では、130校中81校で、62.3％。国立高等専門学校・公・私立高等学校及び国・公・市立特別支援学校では、149校中99校で、66.4％であった。

（９）富山地方気象台への照会、回答による。

校歌に「立山」に関する歌詞がある学校一覧

	学校名		学校名		学校名		学校名
黒部市	宇奈月小学校	富山市	藤ノ木小学校	富山市	興南中学校	高岡市	千鳥丘小学校
	生地小学校		広田小学校		藤ノ木中学校		能町小学校
	石田小学校		水橋西部小学校		大沢野中学校		平米小学校
	村椿小学校		水橋中部小学校		上滝中学校		下関小学校
	中央小学校		上条小学校		杉原中学校		野村小学校
	桜井小学校		堀川南小学校		速星中学校		二塚小学校
	荻生小学校		山室中部小学校		城山中学校		牧野小学校
	若栗小学校		太田小学校		楡原中学校		南条小学校
	清明中学校		熊野小学校		中央農業高等学校		戸出東部小学校
	明峰中学校		月岡小学校		八尾高等学校		戸出西部小学校
	桜井高等学校		新保小学校		富山西高等学校		中田小学校
魚津市	星の杜小学校		大沢野小学校		富山中部高等学校		高陵中学校
	道下小学校		大久保小学校		富山北部高等学校		志貴野中学校
	経田小学校		船峅小学校		富山工業高等学校		芳野中学校
	よつば小学校		上滝小学校		富山商業高等学校		牧野中学校
	東部中学校		大庄小学校		富山いずみ高等学校		戸出中学校
	魚津高等学校		八尾小学校		富山南高等学校		中田中学校
	魚津工業高等学校		杉原小学校		呉羽高等学校		福岡中学校
	新川高等学校		保内小学校		雄峰高等学校		高岡高等学校
滑川市	寺家小学校		速星小学校		富山視覚総合支援学校		高岡西高等学校
	北加積小学校		鵜坂小学校		富山聴覚総合支援学校		高岡工芸高等学校
	南部小学校		宮野小学校		しらとり支援学校		高岡商業高等学校
	東部小学校		古里小学校		富山高等支援学校		伏木高等学校
	滑川中学校		音川小学校		富山総合支援学校		志貴野高等学校
	早月中学校		神保小学校		高志支援学校		市立こまどり支援学校
	滑川高等学校		桜谷小学校		ふるさと支援学校		高岡第一高等学校
上市町	相ノ木小学校		五福小学校		不二越工業高等学校		高岡向陵高等学校
	上市中央小学校		神明小学校		龍谷富山高等学校	氷見市	朝日丘小学校
	南加積小学校		呉羽小学校		富山第一高等学校		宮田小学校
	宮川小学校		長岡小学校		高朋高等学校		十二町小学校
	上市高等学校		寒江小学校		富山国際大学付属高等学校		海峰小学校
立山町	立山北部小学校		老田小学校		未来高等学校富山		灘浦小学校
	高野小学校		古沢小学校	射水市	小杉小学校		南部中学校
	利田小学校		池多小学校		歌の森小学校		北部中学校
	日中上野小学校		芝園小学校		大門小学校		西條中学校
	釜ケ淵小学校		西田地方小学校		大島小学校	小矢部市	大谷小学校
	立山小学校		中央小学校		下村小学校		蟹谷小学校
	立山芦峅小学校		柳町小学校		作道小学校		津沢小学校
	雄山中学校		奥田小学校		片口小学校		石動中学校
	雄山高等学校		奥田北小学校		堀岡小学校		大谷中学校
舟橋村	舟橋小学校		光陽小学校		東明小学校		蟹谷中学校
	舟橋中学校		芝園中学校		塚原小学校		石動高等学校
富山市	岩瀬小学校		堀川中学校		小杉中学校		小矢部園芸高等学校
	針原小学校		東部中学校		小杉南中学校	砺波市	出町小学校
	浜黒崎小学校		西部中学校		大門中学校		庄南小学校
	大広田小学校		新庄中学校		新湊中学校		鷹栖小学校
	豊田小学校		岩瀬中学校		射北中学校		砺波北部小学校
	萩浦小学校		山室中学校		小杉高等学校		庄西中学校
	四方小学校		奥田中学校		大門高等学校		砺波高等学校
	八幡小学校		大泉中学校	高岡市	福岡小学校		砺波工業高等学校
	草島小学校		月岡中学校		東五位小学校	南砺市	福野小学校
	倉垣小学校		呉羽中学校		石堤小学校		福野中学校
	新庄小学校		水橋中学校		西条小学校		南砺福光高等学校
	新庄北小学校		三成中学校	全学校数 333 校中、213 校。		比率：63.95%	